

寺子屋プロジェクト和尚さんのお話 第7回 「白隠禅師坐禅和讃」

今回は前回の「三昧無礙の空広く」に引き続いて、「白隠禅師坐禅和讃」のお話です。

「白隠禅師坐禅和讃」の教えは、次の重要な四句に集約されます。

「衆生 本来 仏なり」(シュジョウ ホンライ ホトケナリ)

「直に 自性を 證すれば」(ジキニ ジショウヲ ショウスレバ)

「自性 即ち無性にて」(ジショウ スナワチ ムショウニテ)

「此の身 即ち 仏なり」(コノミ スナワチ ホトケナリ)

前回の「三昧無礙の空広く」に続く「四智円明の月さえん」とある四智とは、仏の心を表します。

他の三智の根本となる万物の姿をありのままに映す大円鏡智、自分を含めて汎ゆるものが平等と悟る平等性智、すべての対象を何の碍げもなく観察し自由自在に説法する妙観察智、生きとし生けるものに利益するために行いをする成所作智の仏の四つの智慧をいいます。

三昧、呼吸を観察し集中することによって、仏の智慧に近づき、その智慧のままに、妄想の度に妄想を消し、仏性(松原泰道師によれば、本来の人間性)にたちかえる、その時、すべての煩惱が消え去り安心を得られる世界、涅槃が実現することが説かれます。

環境をありのままに心に映す仏の智慧に対して、人間には物の像が脳に映って、それを受け取って感情が生まれる間、知覚と感覚との間にズレがあります。

三昧によって、思っていることと事実の差異を埋めていくことができれば、仏の心に近づけるはずです。

坐禅は、物事をありのままに素直に真っ直ぐ、限りなく真実の姿のままに心に映すことを目指すのです。

それはまた、日常の仕事や食事などの生活の場においても同様です。

坐禅修行中の体験に、夜、皓々と照る月を「我」がみると同時に、「月」が「我」を見ていると感じる瞬間があります。

さらに自分が眼の前の樹上にあって、自分自身の坐禅する姿が見えたと感じられたときがありました。

全部が妄想なのですが、このとき、自分の坐っている姿を、腰骨を立て顎を引いて直したことがあります。

その時だけは、脳の知覚と身体感覚のズレを直せたのかもしれない。

所謂自我意識は、1才半ばに発生することとされていますが、「自我」は赤子以前、母親のお腹にいるときにも既に在ることが判っています。

仏性、仏の心と問われれば、山田無文老師の『むもん法話集』によれば、父母未生以前の人の心まで遡らなければならないのかもしれない。

お釈迦様の説かれた山川草木悉く仏性を有すことの意味は無数の生物を育てている山河を考えてみれば、その真相がみえてくるのではないのでしょうか。

今はただ、一呼吸、一呼吸に意識を向けて、湧き上がってくる煩悩をその度毎に吐く息とともに吐き出していくしかないでしょう。

蛇足) 和尚様のお話から、中村元博士の本にデカルトの「我思う、故に我在り」を引いて、その自己中心思想に対して『『思う』まえに生きている事実があるではないか。』と批判した人物が居たことが書かれていたのを思い出しました。博士は、そこから翻って西行法師の歌「年たけて またこゆべきと 思いきや いのちなりけり 小夜の中山」を引いて日本人が直感的に真実に迫る特質をあげていますが、これらの記憶から私には「仏性」とは「自我」以前の「いのち」そのものを指すのではと感じられました。

火山活動や、時を経て流れを変える川など、自然は人間の遥かに及ばないライフサイクルで、それ自体「いのち」を生きており、空中に漂う小さな羽虫もまさに「いのち」そのものではないのでしょうか。気候危機を前にして、人類は漸く現在の地質年代を「人新世」の呼称へと変えることに思い当たりましたが、その一方でやむことなく妄想、戯論がネット上に渦巻き、コロナが席卷する世界で、ますます「いのち」の大切さ、禪師の仏の教えの大事さが、身にしみます。仏教の出番ではないのでしょうか。

(文責 中村彰利)